

キャッチャーガールの 進路相談

第2話

—恋ちえ



帰りの坂道は自転車を押して下った。心地いい風なんて浴びたくなかったからだ。ブンちゃんは直子の数メートル前で、やはり自転車を手で押して歩いていて、一気に駆け降りる度胸がないからだ。

坂が終わった後も、二人は自転車を押したまま歩いた。「一中の校舎、けっこう良かったね。設備もしっかり整ってたし」

ブンちゃんは懸命にさり気なさを装って、話を切り出した。

「ブンちゃんは一中にしなよ」直子は言った。「野球部にも入れることだし」

「……直ちゃん、今回は諦めるのが正解だと思うよ。あの顧問を説得するのは、一年かけても無理でしょ」

「……」

直子はむつつりと黙った。それからユキちゃんのことを考えた。ユキちゃんはその顧問に負けたのだろうか。それとも自分からマネージャーになることを選んだのだろうか。

マネージャーになって、三年間、他人が野球しているのを脇で見るだけ？

想像するだけで発狂しそうだ。

「そういえば、一中には女子選手がいたけど」

突然止まったブンちゃんの自転車の後輪に、ゴツン、と前輪が弾かれた。

直子は思いきり顔をしかめた。

「なんて？」

「一昨日、二中の見学に行ったんだ。そこで女子が男子に交じって野球してるのを見た」

「……二中」

「そっちの方がまだ可能性あるよ。どうしても選手にこだわらなければ」

カラカラカラと音をたてて、ブンちゃんの自転車が進みはじめる。

直子は立ち止まったまま第二中学についての情報を引っ張り出した。決して野球が強い学校ではない。最近成績が伸びてきたとはいえ、せいぜい2回戦止まりだ。それまでは毎年1回戦敗退だったと聞く。地域も応援するのは第一中学ばかりで、第二中学の野球部なんて誰も気にも留めていない。

——俺だって選べるなら一中にするっつーの。

卒業が近づいた六年生が、そういう愚痴をこぼしているのを聞いたことがある。結局その男子は違う部活を選んだそうだ。船津オリオンで輝いていた頃の記憶が、弱小野球部に所属することを拒むのだろうか。

直子は少し考えてから訊ねた。

「野球部、どんな感じだった？ やっぱり下手？」

「ちらっと見ただけだから、そこまでは」

「ふーん、そっか」

……ふーん。

一晩寝て考えた結果、直子は第二中学を見に行くことにした。

次の日の朝ブンちゃんにその胸を伝えようと、あからさまにホツとした表情になった。

「いいんじゃない。一中は難しそうだし」

ブンちゃんは、直子が第一中学を諦めたと思ったらしいが実際は間違だ。噂の女子選手がどうやって顧問を口説いたかを聞き出すために、直子は第二中学を訪れることにしたのである。もちろん入部する気など最初からゼロだ。

ブンちゃんは「一人で行くの?」としきりに聞いてきたが、直子は決して「一緒に来て」とは言わなかった。顧問のことを省いても、ブンちゃんは直子が第一中学の野球部に入ることをいい選択とは思っていないさそうだった。そんなヤツについてこられては話がややこしくなる。

放課後、どうにかブンちゃんを振り切ると、直子は昨日と同じように一度家に帰った。それからメモと筆記用具をトートバッグに突っ込んで再び外に飛び出した。

第二中学があるのは比較的街の中だ。坂を登ることもなく、自転車走らせて30分ほどで到着した。やはりこちらも部活の時間帶らしく、放課後のテーマソングのように吹奏楽部のパート練習が聞こえてくる。

直子はまず様子を見ることにし、敷地を囲むフェンスの外側

から校舎の後ろにまわった。第一中学よりもやや小ぶりなグラウンドでは定番の運動部が活動していて、野球部の練習場はその一角にあった。人数はたった二十名ほどだ。学年関係なく入り乱れて練習しているチームは和気あいあいとした雰囲気、第一中学の緊張感には程遠い。

噂の女子選手はどこだろうと目を細めて探していると、野球部員たちの間でバインダーを手に何かをチェックしていた少年が直子に気付いた。

「人探し?」

少年はフェンスの前まで来て訊ねた。誰かの妹だと思ってるのかもしれない。

直子は「違います」と答えた。

「野球部の女子選手を。部活見学に来たんです」

「へえ、じゃあ入部希望者?」

「まだわかんないですけど……」

直子から事情を聞いた少年は、「あつちから入ってきて」と校舎側の方を指差した。

「晴香——、女子部員なんだけど、今用具室の方に行ってるんだ。すぐ戻ってくると思うし、そしたら伝えるから」

どうも、と直子は会釈する。親切でありたいがこの人は誰なんだろう。

「俺、野球部のマネージャーなんだ」

直子の訝しげな視線に気付いて、少年はにっと歯を見せて

笑った。

男子マネージャーが存在することは知っていても、専属でやっている人はじめて見た。男子マネか……。直子は一瞬、ブンちゃんに向いてるんじゃないだろうかと考えた。

言われた通り校門まで戻り、自転車を校舎の隅に置いてグラウンドに出ると、野球のユニホームを着た女子がグラウンドを突っ切ってこちらに走ってくるのが見えた。

横山晴香、と女子部員は名乗り、帽子を脱いで額の汗を袖で拭った。

「日差しも強いし、あつちで話そっか？」

「はい、お願いします！」

「いい返事。何年生？」

「六年です」

横山さんは気さくな人だった。現在三年生で今年引退だそう
だ。

二人は雑談をしながらグラウンドの隅にある桜の木の下のベンチまで歩いた。葉桜の影が落ちるベンチには毛虫が乗っていて、躊躇する横山さんに代わりに直子がトートバッグの底でさっと払った。

「ありがとう」

横山さんは微笑んで直子の隣に腰を下ろした。

「それで、相談があるんですけど」

直子は少年野球でキャッチャーをしていること、中学に入っ

ても野球を続けたいこと、第一中学の監督の反応などを一通り

説明した。中学を選べる立場にいることは告白すべきか迷った。弱小校だから入りたくない、と所属している本人には言いづらい。しかし本気で相談に乗ってくれている相手に隠し事をするのもつと悪いような気がして、結局すべて告白した。

「難しいね」

横山さんは怒りもせず、自分のことのように唸った。

「高坂先生、厳しい人だから」

「知ってるんですか？」

「年に一度、この時期に練習試合をしているの。今年ももうすぐ
なんだけど」

横山さんの話を聞き、直子は少し考えて言った。

「大事な練習試合があるって」

「え？」

「そんなことを、監督がちらつと言っていたので」

「高坂先生がウチのことを？」横山さんはキラキラした目で直子を見た。「うれしい！あとで皆にも伝えなきゃ」

「あの、特定はできませんけど」

直子には弱小校との練習試合が大事だなんて思えなかった。けれど横山さんは人差し指を立て、「いいの。モチベーションは上がるもん」と悪戯っぽく笑った。すっかりした人だ。

「——それで、横山さんはどうやって周りを説得して野球部に入っただんですか？」

「説得？」

「はい。その方法を教えてほしいんです。できたらあの監督に使いたくて」

横山さんは眉間にしわを寄せたまま首を少し傾ける。

「わたしの場合は特に反対されなかつたな。顧問が大雑把な性格で、『入ってもいいですか』って訊いたらふたつ返事でそのまま。人数が少なかつたせいもあると思うんだけど」

「……そうなんですか」

「あ、ごめんね、参考にならなくて」

いえ、と首を振りつつも、内心がぐくりきていた。

その様子を見た横山さんが「たぶん」と続ける。

「高坂先生が断つたのは、強豪校っていう部分が大きかつたらだと思ふ。可部井さんのことが邪魔だとか、そういう意味じゃなくて、何かあつてからじゃ遅いと思つたんじゃないかな。いくら本人ができるって言つても、教師として男子と同じ量の運動をさせるわけにはいかないわけだし」

「そんなの別に気にしません。今だつて男子にも負けてないし」

「……でも、強豪校の練習には体がもたないかもしれないよ。それに中学校に入ると男女の体格差も急に開いちゃうし。可部井さんは努力家みたいだから尚更心配。辛くて辛いつて言わずに頑張るのが目に見えるから。平気だと思つても無理が続けば、ある日ぶちんつて切れちゃうこともあるから」

横山さんは遠くにいる野球部員たちをぼんやりと見つめなが

らつぶやく。

「いくら気をつけていても、事故は起きる時は起きると思うし」

それから直子に向き直り、「もう一つ」と人指し指を立てた。「気がかりなのがメンタル面。一中はレギュラー争いが激しいから、男子ばかりの中で戦うのは並大抵のパワーじゃ潰れちゃうと思う。それに部全体の雰囲気にも影響が出てくると思うし、そんなところで野球に集中しなきゃいけないから、男子の何倍も大変な目に合うと思うよ」

直子は言われたことを自分に当てはめながら考えていた。本当に無理なのだろうか。こんなにやる気があるのに精神的に参つてしまう日がくるのだろうか。それでも、わたしなら大丈夫だと、頭の隅で思っているもう一人の自分がある。

「じゃあ横山さんならどうしますか」

「私？」

「もしも一中に入學していたら」

「うーん、すぐく悩むと思う。昔から野球は好きだつたけど、でももしかしら別の方法を選ぶかもしれない。例えばソフト部とか」

「ソフト部ですか……」

「わたしも可部井さんと同じで自分でプレーしたい方だから、もし野球部の選手になれないならマネージャーよりはそつちを選ぶかなあつて」

「……そうですか」

「ごめんね」横山さんが遠慮がちに言った。「できれば応援してあげたいけど、一中で野球をするのはやっぱり難しいんじゃないかなあって思うの」

直子は黙って頷いた。

「あんまり根を詰めないでね」

横山さんは最後に直子の顔を覗き込んで忠告してくれた。直子はお礼を言つて学校を出た。

時間は5時を過ぎていたが外はまだ十分明るい。直子はチーム練習に合流することにした。思いきり野球がしたい気分だった。

どうしたらいいんだろう。なにか、素晴らしいアイデアは転がっていないだろうか。自転車をこぎながら、10メートル進むごとに思った。

第一印象で横山さんに抱いた親近感は気付けばくしゃりと歪んでしまっている。難しいかどうかなんて、やってみるまでわからないのに。みんな臆病だ。横山さんも高坂先生も、大人しくマネージャーにおさまってしまったユキちゃんも。

練習グラウンドに着いたとき、直子はあることを決めた。

練習から帰った直子を玄関で迎えたのは、隣の家の息子だった。昨日、直子のお母さんがお裾分けした漬物のタッパーを返して来たのだという。

お母さんはブンちゃんをとても気に入っていて、今日もやたらと上機嫌だ。けれどブンちゃんの真の目的は、タッパーを返すことでも隣の主婦を喜ばせることでもないのだろう。昼からの流れを汲むに直子の様子を窺いに来たに違いない。

案の定ブンちゃんは玄関を開けた直子に意味深な視線を送ってきた。ちょうど直子も頭の中を整理したかったので、「ちょっと宿題の事なんだけど」と親の手前無難な言いわけしつつブンちゃんを部屋に上げた。

「宿題って、今日は漢字ドリルだけじゃなかった？」

2階の直子の部屋に入るなり、ブンちゃんが真顔で言った。

こいつ……。ひとがきつかけを作ったっていうのに。

この幼馴染みは頭が良いくせに妙に察しの悪いときがある。

直子は勉強机の脇にトートバッグを投げ置くと、ドスツとベッドの端に座った。

「話聞いてきたよ。一中で、女子部員の人に」

ブンちゃんは真つ黒な瞳をゆらし、それで、と先を促した。

「わたし、次の大会で優勝することにしたから。それでそのトロフィーを持って、もう一回あの監督のところに行こうと思う」

「それは……、なんでまたそんなことに」

「一中で野球がしたいの。他に方法も思いつかないし」

第一中学で野球をするには、高坂先生という鉄壁を崩し落とす必要がどうしてもある。直子が考えたのは、自分の実力を知つ

でもらうことだ。高坂先生や横山さんが反対するのは、結局のところ直子の実力がどれ程なのか知らないからなのだろう。

「だからって優勝って……。そんな簡単にできるものでもないでしょ」

「去年二位だったんだから、一応勝算はあるよ。綿密な作戦会議もやることになったから。それに全体の守備練習を強化するためにノックの本数も増やす。全員のバッティングフォームも見直す」

「あと半月しか無いの？ それにその大会って、低学年チームの練習に付き合おうって言ってたやつじゃなかった？ 時間あるの？」

しまった、忘れていた！

直子がマズイという顔を持ち上げると、呆れ顔のブンちゃんが目が合った。

「どうするの？」

「……約束したから、面倒は見ると。でも優勝もする！」

内心無理かもしれないと弱気になった直子を見透かしたように、ブンちゃんはため息をつく。

「バドミントンとか、バレーとか、野球以外にも運動部はあるし、中学から新しいことをはじめのもアリだと思うけど」

「無理。一中の野球部以外入りたくない」

「直ちゃん、いい加減に」

「ブンちゃんさ、この前の一中でマネージャーを連れて来てく

れた男子部員の下半身見た？」

小言を遮られたブンちゃんは、話が掴めないという顔をした。

「さあ、覚えてないけど」

「小鹿みたいに細かった。あんなヤツでも入れるのに、どうしてあたしは駄目なの？ 不公平だよ」

直子はチェック柄の枕を引き寄せ、一発グーパーパンチをくらわせた。

わたしの方があの男子よりがきつと上手くやれる。チームに貢献できる。

なのに女子というだけで外されるなんて、そんなの理不尽だ。直子は今までの練習で、女子だから手加減してほしいなんて言ったことは一度もないし、走りこみだつて男子と同じ量をこなしている。

直子とブンちゃんはしばらく黙っていた。

背中を向けたブンちゃんは壁に貼られた写真を見ているようだった。直子が補欠で初めて試合に出たときの船津オリオンの集合写真だ。前列でしゃがんだ直子の隣には、笑ったユキちゃんが映っていた。

外からの光は徐々に薄くなり、代わりにタンスから伸びる影が濃くなった。1階から夕飯の味噌汁の匂いがかすかに漂ってくる。

そろそろ母親が、「ごはんよー」と呼びに来るんじゃないか

と思いはじめたとき、ブンちゃんが振り返り、たっぷり溜めこんだモノを吐きだすように言った。

「じゃあこうしよう。僕も大会まではできるだけ練習に顔を出す」

直子は「は？」と口を半開きにした。意味がよくわからない。

「だから、練習に出るって」

「何のために？」

野球が上手い人の発言なら理解できるが、なにしろ相手は運動音痴のブンちゃんだ。直子の疑問を受けてブンちゃんは言い直した。

「本に載った効果的な練習法とか色々覚えてるし、プロの正しいフォームも写真で何度も見たんだ。だから、ちょっとくらいは役に立つと思う」

「補助してくれるの？」

「——うん。そのかわり約束は守ってあげなよ」

ブンちゃんは唇を尖らせて自信たっぷりに言った。

手始めにブンちゃんは翌日の作戦会議に出席した。周りのレギュラーたちからは「何故？」という空気が漏れ出ていたが、本人はいたって気にしていなかった。それどころか監督とレギュラーの間に立って、ブンちゃんは積極的に意見を出した。不思議な光景だ。キャッチボールも口クにできない選手が少年野球のチームを仕切っている。

しかしこれはある意味、ブンちゃんが試合に出たことがないお陰とも言える。毎年応援メンバーとして試合を見てきたブンちゃんは、自分のプレーで手いっぱい選手たちよりも冷静に敵を観察・分析できたようだ。

おまけにブンちゃんには虎の巻がある。熱心な保護者たちが毎試合つけてくれているスコアブックだ。ブンちゃんはそれを段ボールから引つ張り出し、わかりやすい解説を書き加えコピーしてみんなに配った。社長秘書並みの素晴らしい手際の良さだった。

作戦会議のあと、監督がブンちゃんの肩を掴んで「育て方を間違った」と謝っているのを見かけた。「は？」と、ブンちゃんは怪訝(くわげん)に眉を寄せていたが、直子には監督の気持ちがよく理解できる。

ブンちゃんにあと少しでも運動センスが備わっていたら、あのへぼへぼ送球がもう少しマシになったら。というか、ここまで頭でイメージできているのに、どうしてああなってしまうのか。……可哀そうに。監督は今後しばらく自責の念にかられることになるのだろう。

その後もブンちゃんはバッティングフォームのビデオ撮影やら、本で会得した効率的なノックや走塁練習の方法を、監督と相談して積極的に取り入れた。

その間の直子は空いている時間に、隼人と共に低学年チームの大会指導を行った。まあ、実際はみんなを一箇所に集めての

ノックやバッティング練習をただけで、特に大したことはしていない。アドバースについても「いつも通りにすればいいよ」とか、「チャンスはどこかにあるから、例え負けそうになっても諦めるな」とか、一人ずつそれらしく励ましたくらいだ。

それでも上級生というのは何をしなくとも憧れる存在らしく、妙にキラキラした目で見つめられながらの指導は大変やり辛いものだった。

そうこうしているうちに大会の日がやってきた。

今回は市の少年野球連盟に加入している十六チームがゴールデンウィークの三日間を通し、勝ち抜き式のトーナメントで戦うことになっている。4ブロックあり、直子たちはAブロック。去年優勝した三河ジュニアはBブロックだ。開催者側は去年の成績を踏まえてカードを組んだようだ。

船津オリオンは初日の1回戦から波に乗っていた。というのも対戦チームのプレーが、昼休みの「みんなで野球やろーぜー」と同じノリだったからだ。レギュラーは交代制、ポジションはじゃんけん。小学生のクラブにはたまにあることだ。観戦に来ている親たちもカメラを構えるのに一生懸命で、勝敗にはあまり執着していないらしい。

これでは負ける方が難しい。

直子たちは実力の半分くらいの方で1回戦を圧勝。いいウォーミングアップになったのか、その日の2回戦も3対0とス

ムーズに乗り越えた。

直子は試合が終わったあと観覧席に上がり、試合観戦していたブンちゃんと同流した。

「直ちゃん、何か飲む？」

ブンちゃんはそう訊ねながら、足元に置いたクーラーボックスの中を探る。保護者からの差し入れのようだ。

「炭酸ある？」

「オレンジかコーラなら」

「じゃあオレンジで」

キャップを捻ってごくごく喉を潤す。保冷材が溶けてしまっているのか、思いの他ぬるかった。

「そういえばブンちゃんて、いつこっちに着いたの？」

「2回の裏。アッキーが一点入れたとこ」

「じゃあ向こうは結構早く終わったんだ」

別の区のグラウンドで行われている低学年の部の試合に、ブンちゃんは補助として先ほどまで出向いていたのだ。試合が終わってすぐ、直子たちのいるスポーツセンターまで親切な保護者が車で送ってくれたらしい。

「で、勝敗は？」

「8対12で負けた」

「あー……そうなんだ。乱打戦？」

「なんて言うんだろ、ラッキー戦？ ま、お互いだけけど」

お互いがお互いのエラーで得点を稼いだ結果、高得点が叩き

だされたのだとブンちゃんは説明した。守備面が不安なチーム同士の戦いではよくあることだ。

「でも惜しかったよ。捕球ミスしても慌てないで、上手く処理してアウトにした場面も何度かあったし」

練習に付き合った甲斐も少しはあったようだ。

「そっか。ならいいけど。みんな泣いてなかった？」

「でもないかな。どつちかって言うんですけどスッキリしてたよ。直ちゃんの頃とは状況も違うんじゃない？前は低学年の部なんてなかったし」

ブンちゃんは新たに始まった次の試合を眺めながら言った。

直子はふと、自分が出た初試合のことを思い返した。あれは小学三年生の秋の大会で、どうしても試合に出なかった直子は、補欠に決まるまで願掛けのように毎日庭でスイングの練習をしていたのだ。あの頃ブンちゃんはまだクラブに加入していなかったけれど、練習にはたびたび付き合ってくれていた。ちょうど今回のように。

もっと早く野球をはじめていればブンちゃんはもう少し上手くなっただろうか。

直子は疲れた頭でそんなことを考えながら、再び炭酸を口にした。

翌日の試合は午後からで、これに勝ちさえすればいいよ決戦だ。しかし相手は前回の優勝チーム、三河ジュニアだ。つ

まり前回二位の直子たちからすれば、ここが事実上の決勝戦ということになる。

先の二試合とは違い、すんなりとはいかないだろう。観覧席を埋める保護者やチームメイトの雰囲気も、どこかぴりつとしていた。

今試合の要注意人物はもちろん三河のエースピッチャーだ。去年はタイミング良く挟んでくるスローボールに打線が翻弄された。ブンちゃんは、落ち着いてバットを振るようにと最後まで念を押した。

隼人がじゃんけんで負けて相手が先攻を選んだため、船津オリオンは後攻になった。先発の隼人がマウンドに立ち、直子は自分の定位置にどっしりしゃがむ。ここからだと言った顔がよく見える。フライを捕ったレフトのホツとした表情も、ゴロを捕球ミスしたサードの口が「あっ！」と大きく開くところも。今日は嬉しい表情を多く見られますように、と直子は心の中で願う。

ここ半月の練習の成果か、それとも昨日ブンちゃんが「全員に8時は就寝するように！」と口を酸っぱくしたおかげか、守備についたナインたちはいつもよりきびきびと仕事をこなした。

選手たちは常に球の行方に気を張っていて、例えば誰かがミスしてもバックアップにまわっていた選手がそれをフォローした。穴がない。直子は球場のダイヤモンドの中に、赤外線の色

キュリテイセンサーが蜘蛛の糸のように張り巡らされている光景を想像した。

今日のは行ける！

しかし守りは完ぺきでも、攻撃が上手くいくとは限らない。ランナーは出たものの、両チームともに得点のない回が続いた。船津オリオンの雰囲気が違うことに向こうの監督が早々に気付いたようで、自軍の選手たちに何か吹き込んでいたようだ。

そして相変わらずストリートとスローボールを絶妙なバランスで投げこんでくるピッチャーに、今年も苦戦を強いられていた。監督がサインを出している様子はないので、ピッチャーが自分で決めていいのか、それともバッテリーを組むキャッチャーの配球がいいのかのどちらかだろう。

直子はベンチで打順を待ちながら、27の背番号がついた相手キャッチャーの後ろ姿を見つめた。三河ジュニアには女子選手がおらずキャッチャーももちろん男子だ。27番はふつくらとした体格で、キャッチャーボックスに腰を落としたその姿は彼自身がボールをすっぽりと包むミットのようだった。

自分も似たような身体つきをしていると、直子は自覚している。

小三になって監督にキャッチャーになることを勧められたときは正直迷った。少年野球でのキャッチャーのイメージは太っている人だったし、あの鎧のような防具をつけるのも正直煩わ

しかった。そんな直子のもやもやを払しょくしてくれたのはユキちゃんだ。

「みんなに指示を出すキャッチャーは、学級委員みたいなものよ。アッキーたちに任せたらクラス崩壊しちゃうでしょう。だから直ちゃんじゃなきゃ駄目なの。馬鹿男子のお尻叩けるのは、うちには直ちゃんしかいないもの」

ユキちゃんの言い方は上手かった。ちょうどその頃、直子は実際に学級委員をやっていたし、練習でふざけてばかりいる同年の男子たちにはイライラしていたからだ。

直子はそれからすぐキャッチャーになるための練習を開始した。そして今日までやってきたのだ。

「可部井さん、そろそろ出番だよ」

隣に座っていた五年生に肩を叩かれて、直子は立ち上がった。

「がんばれ」

と、皆に声を掛けられた。

それもそのはずだ。

直子は得点板を見た。現在6回の裏で0対1。三河ジュニアに一点のリードを許している状況。ワンアウトで一、二塁。二塁には単人が立っている。が、問題は時間だった。今大会では7イニングの90分制と決められている。そして先ほど80分を超え、審判から「この回が最終です」と案内があったのだ。

これを逃したら優勝できない。

直子は観覧席の方を振り仰いだ。保護者や低学年の子の真ん中で、ブンちゃんはスケッチブックをかがけていた。直子は目を細めた。……字が小さくて全然見えない。

そのとき、パチン、と乾いた音がこちらまで飛んでくる。直子は振り返った。六番打者のアッキーだ。弱いゴロがファースト側に転がっていく。打球が緩かったことが幸いして、前進してゴロを処理したファーストはダブルプレーを狙わず一塁ベースカバーに入ったピッチャーに送球。アッキーはアウトとなった。ランナーはそれぞれ二、三塁へと進塁したが、ツーアウト。いよいよ、正念場だ。

「可部井、ここが勝負だぞ」

そばにやって来た監督が当たり前のこと言った。直子は黙って頷いた。めずらしく緊張していたのだ。

バットを受け取ってバッターボックスに立つ。このピッチャーとは試合で何度か顔を合わせているが、去年ここに立った時よりもずいぶん身長が伸びているように見えた。

跳ねあがった足が、大きく踏み込まれる。同時に直子は力いっぱい腕を振るった。

「ストライイクー」

沸き上がる歓声と、「どんまいー！」という応援が一緒くたになつて直子の耳に届く。やばい、と一瞬弱気に飲まれそうになるのを、直子は頭を振って阻止した。

これはまだ準決勝だ。こんな所で負けている場合ではない！

わたしは、あの監督にトロフィーを突き付けなくてはいけないのだ。

ピッチャーがチラリと三塁の隼人の方に視線を向ける。それからすぐ振りかぶった。

直子はきゅっとバットを握り直す。

落ち着いて。ブンちゃんの声が耳元で聞こえたような気がした。直子は目を見開き、渾身の力でバットを振り抜いた。

鈍い音とともに打球が上がる。

その瞬間、掃除機のコンセントを引き抜いたように、辺りが一瞬だけ静かになった。直子は本能的に駆けだした。

「落ちる！ 落ちる！」

と、誰かが叫ぶ。

ボールは腕をいっばいに伸ばしたショートグラブのさらに上を超え、内野と外野の間に落ちて転がっていく。

まず隼人がホームに向かう姿が視界の端に映る。そして二塁ランナーも三塁を回った。

数秒後、これまでにない歓声が会場を包んでいた。

次の試合のあと直子たちは表彰台の上に立っていた。決勝も無事に勝利し、船津オリオンはみごと優勝したのだ。隼人が50センチ以上あるトロフィーを主催者から授与され、直子は横でそのとんがっている先を支えた。

「今日は《マル屋》に行くぞ！」

表彰式のあと、監督はホクホク顔で皆を集合させて言った。

《マル屋》とは駅前にあるお好み焼き店だ。安い！ 美味しい！
で地元住民に人気がある。

「えー、またお好み焼きかよ」

「肉がイイよなー」

「やーきにくっ！ やーきにくっ！」

監督は激しい焼き肉コールド無視して、6時に駅前集合と言いつつ切った。ぶーぶー文句を垂れながらも、チームメイトたちの顔は晴れやかだ。低学年の児童たちは親に呼ばれて車に乗り込み、自転車であつて来た五、六年生たちも次々とサドルにまたがって消えていった。

直子はワゴン車に荷物を積んでいる監督に、トロフィーを貸してくれるよう頼んだ。

「親戚にでも見せに行くのか？」

「そんなところです。《マル屋》に持って行くので、ちよつとだけ貸して下さい」

「いいけど、気をつけるよ」

監督は心配そうな顔をしつつもトロフィーを渡してくれた。今回の立役者である直子の頼みなので、なおさら拒みにくかつたのだろう。

トロフィーを赤ん坊のように抱いて駐輪場にやってきた直子を見たブンちゃんは、「優勝おめでとう」という顔を一転、思いきり眉間にしわを寄せた。

「どうするのそれ」

「これから一中に行ってくる」

「これから？ どうやって？ まさかカゴに乗せていくんじやないよね？ 傷つくよ」

「大丈夫。もう用意してあるから」

直子は肩に下げていたスポーツバッグから、ブランケット二枚とビニールヒモを取り出した。プレゼントのようにトロフィーをブランケットで包み、そつとカゴの中に入れて、ヒモで固定する。突き出ているがこれで動かないし、転ばない限りはカゴから飛び出すこともないだろう。

「じゃあ行ってくるから」

茫然と眺めていたブンちゃんは、我に返つたように顔を上げた。

「僕も行くよ」

「え、いいよ。別に」

「トロフィーが心配なんだよ」

ブンちゃんは眉をひそめて言った。

確かに一人で運ぶよりは楽かもしれない。例えそれが体力のないブンちゃんでもだ。直子は考えを改めて、ブンちゃんをお供に第一中学へ向かった。

つづく